A Mass Protest by Enryakuji Monks: *Gyokuyō*, Kaō 1 (1169), 12th Month, 23rd Day (KW-08 Shiryō 8 Gyokuyō)

FINAL FINAL

Source:
『玉葉』[1]嘉応元年一二月二三日
Gyokuyō,[2] (published in Sumiya Shobō) *vol. 1, pp.68-69.*

Nan Ma Hartmann
Sachiko Kawai
Laura Nuffer
January 17, 2009

原文

已時許或人云、延暦寺衆徒集会京極寺[3]、漸申成親卿可被遠流之由。而依無許容、忽発向云々。（中略）已及午後、下人説曰、衆徒已参大内。又上皇御所、公卿等多以参集、又帯箭之輩満院殿中、甚周章云々。（中略―兼実参内）又大衆等有左衛門陣外。其数不知幾多。各放声叩鼓。高声狼籍不可勝計。難記于端毫。自右衛門陣経高遣戸方、参入于版。主上御萩戸。則以参上入見参。有召仍参御前。（中

---

[1] 『玉葉』：九条藤原兼実（1149―1207）の日記。『玉海』（ぎょくかい）とも呼ばれた。九条家本、内閣文庫本（六八巻）をはじめ諸本がある。日記記載の年代は長寛二年（1164）から正治二年（1200）まで（但し永万元年を欠く）、兼実十六歳から五十五歳まで四〇年間にわたっている。藤原兼実は摂政忠通の三男、八歳で保元の乱を迎え、次いで平氏政権初頭以来朝廷に立ち、後白河院政下に右大臣であったが、後鳥羽天皇の時、摂政となって政局の中心に位した。その間、平氏の専権、源義仲の京都進出、源平勢力の交替、武家政治の成立という、史上稀な波瀾のうちに生涯を送った。従って日記の記事内容は複雑を極めるが、特に公家内部の事情と公武関係の経緯とがその中核をなしている。兼実は才学優長にして朝廷の典故に通じ、その記事はよく時代の動きに応じて新時代の武士をも理解する力を備えていた。清盛の遺言を活写して当年の武士の精神の真骨頂を今日に彷彿たらしめているごとき表現力は、他の公家日記にほどんと見られない、本日記の特色である。(『平安時代史事典』) 嘉応元年には兼実は２１歳で、右大臣（正二位）であった。（新訂増補国史大系『公卿補任』第一編 p.469）

[2] 玉葉 (*Gyokuyō*)：Also called *Gyokukai* (Sea of Jade). Diary of the court official Kujō Kanezane. Kanezane served as regent in the imperial court and liaison to the Kamakura shogunate. Written in classical Chinese prose, *Gyokuyō*'s 66 chapters are a valuable source of information on the late 12th century. (*Kodansha Encyclopedia of Japan*)

[3] 京極寺：平安京の東京極大路の東側、三条末路の北側に所在した寺院。『今昔物語』によると、桓武天皇の皇子賀陽親王によって創建された。やがて延暦寺の末寺となり、長治二年（1113）には山門衆徒が祇園神輿を担いで当寺に集会し、更に永久元年（1113）保延四年（1138）、永暦元年（1160）、嘉応元年（1169）などにも当寺の神輿が振り出されて嗷訴（ごうそ）が行われるなど、山門衆徒の拠点の一つになった。一方、永万元年（1165）、建保元年など焼失を繰り返し、応仁の乱にも焼失した。当寺は現在の上京区御霊前町の地に移り、真言宗の単立寺院になっている。（本尊は平安中期の薬師如来坐像）。(『平安時代史事典』)

略）余招兼光問此事子細。兼光云、尾張目代与比良野神人、有相論事。相逓訴申之間、不召問子細、触神人三人禁獄。仍衆徒等、以奏状訴座主云々。以頭弁奏聞、即被放帰了。于是衆徒等太懐忿怨之心、弥増訴訟之思。今朝辰刻許、先集参京極寺。次参大内。兼光為御使参院、申大衆参入之由。院宣云、衆徒早参院可申訴。専不可参内裏云々。然而大衆敢不承引。如此職事等往反已両三度、尚未事切云々、者、（中略）座主、邦綱卿等同在于 此（清涼殿萩戸）所 。自院被仰座主之旨、衆徒参内裏之条尤不当、早可参院。若尚大衆不参ハ、皆悉追帰彼寺、座主引率僧綱已講、可参院。其時可有尋沙汰云々。即以其旨、座主仰衆徒。衆徒申云、〔裁〕載報之条全不可。仍参于内裏。如此時雖幼上参内、是恒例也。更以不可参院。只不奉裁許之仰者、不可帰本山。神輿又不可奉迎、只任手足可逐電。天台宗之仏法滅亡、在于此時云々。即以其趣仰信範、信範帰参了。此間、沙汰評定、非遑于記録。（中略）、今日於院公卿等有宣儀云々。

<u>読み下し文</u>

巳時（みのとき）[4]許（ばかり）、或人云く、「延暦寺衆徒（しゅと・しゅうと）[5]、京極寺に集会（しゅえ）[6]す。漸（ようや）く[7]成親卿[8]遠流にせらるるべきの由を申す。而るに、許容（きょよう）無きに依りて、忽（たちまち）に発向（はっこう・ほっこう）す」と云々。（中略）
巳（すで）に午後に及ぶ。下人、説（と）きて曰く、「衆徒、已（すで）に大内（おおうち）[9]に参る[10]。又、上皇御所（ごしょ）に、公卿等、多く以て参集す。又、帯箭（たいせん）[11]の輩、院の殿中（でんちゅう）[12]に満（み）ち、甚だ周章（しゅうしょう）す[13]」と云々。（中略―兼実参内）

---

[4] 巳時： 現在の午前１０時頃。また、その前後二時間。一説に、その後二時間。（『日本国語大辞典』）
[5]衆徒：諸大寺に止宿していた僧徒。院政期以降は僧兵をいう。特に、奈良興福寺等で、武器を持って、社頭や寺門を防御の下級僧侶をいう。（『日本国語大辞典』）
[6] 集会：衆徒・僧等がの会合すること。（『日本国語大辞典』）
[7] 漸く：もはや。すでに。（『日本国語大辞典』）
[8]藤原成親（３２歳）は２４日付きで解却見任（権大納言）、配流させられるが、のち２８日に召返され、３０日本位に復し、すぐに還任となる。
藤原兼実（２１歳）は正二位、右大臣。（新訂増補国史大系『公卿補任』第一編 p.469）
[9] 大内：皇居の異称。内裏。禁中。宮中。（『日本国語大辞典』）
[10] 『兵範記』の同日条によると、「待賢門大衆先立神輿六基、押入門中、建礼門壇上南面奉居神輿六基」とあり、大衆は大内裏の外側の建礼門の前に、神輿六基を南を向けて置き去ったことが分かる。（増補史料大成『兵範記』五 p.146）
[11] 「帯箭の輩」で武士のことを指す。 「箭竹」とは、 箭竹（やだけ）を帯びること。（『大漢和辞典』）
箭：長さや太さをそろえて作った矢（『漢字源』）
[12] 御殿の中。営中。殿内。（『日本国語大辞典』）
[13]周章：「周章（あわ）つ・周章」あわ」てる」とも読める。不意をつかれて落ち着きを失う。びっくりしてまごつく。うろたえる。狼狽（ろうばい）する。現代では「あわてて…する」の形で、非常に急ぐ意に用いる場合も多い。（『日本国語大辞典』）

又、大衆等、左衛門の陣（じん）[14]外（がい）に有り。其の数、幾多（いくた）[15]を知らず。各（おのおの）、声を放（はな）ち、鼓（つつみ）を叩く。高声（こうしょう）[16]の狼籍（ろうぜき）、勝（あ）げて計（かぞ）ふ[17]べからず。端毫（たんごう）[18]に記し難し。
右衛門[19]の陣より高遣戸（たかやりど）[20]の方（かた）を経（へ）て、版（はん）[21]に参入す。主上（しゅじょう）[22]、萩戸（はぎのと）[23]に御（ぎょ・おは）す。則ち以て、参上し、 見参（げざん・げんざん）に入（い）る[24]。召し有り。仍て、御前（ごぜん）に参る。（中略）
余、兼光[25]を招き、此の事の子細を問ふ。兼光、云く、「尾張の目代[26]と比良野の神人[27]、相論の事有り。相ひ逓（たが）ひに[28]訴へ申すの間、子細を召し問はず。

大衆が院御所に来るだろうと思っていたところが、内裏に 行ってしまったので、慌てているということ。『兵範記』同日条に、「検非違使武士等依召参院陣、其数如雲霞」とある。また、「前大納言[平]重盛卿以下三<件卿二百騎、宰相中将[平]宗盛百三十騎、前大貳頼盛卿百五十騎＞、率参五百騎」とある。（増補史料大成『兵範記』p.146-7）

[14]左衛門府陣：左衛門府の武官が陣を設けて、警固にあたる内裏の建春門をいう。（『日本国語大辞典』）

左衛門府：令制での官司の一つ。右衛門府とともに宮城諸門の警固や天皇行幸の供奉などをつかさどった。職員に督・佐各一人、大少尉・大少志各二人のほか、府生、衛士などがある。天平宝字年間に司間衛と一時的に改称した。左右衛門府は大同３年（８０８）左右衛士府に併合したが、弘仁２年（８１１）１１月左右衛士府を左右衛門府と改めた。（『日本国語大辞典』）

[15]幾多：どれほど。どのくらいの多数。（『日本国語大辞典』）

[16]高声：大きい声。高い声。こうせい。

[17]勝計：「勝計（しょうけい）す」とも読める。一つ一つあげて数えること。とりたてて数えること。多く「勝計すべからず」の形で、数えきれない意に用いる。

[18]端毫：毫端（ごうたん）のことか。毫端（ごうたん）：筆のさき。また、転じて、筆の運びのはしばし。また、絵や文章の勢い。筆端。（『日本国語大辞典』）

[19] 右衛門陣：右衛門の武官の詰め所があった内裏外郭門である宜秋門（ぎしゅうもん）の異称。（『日本国語大辞典』）

右衛門：令外の官の一つ。左衛門府とともに衛士を率いて宮城諸門の警衛、開閉をつかさどった。職員に督、佐各一人、大尉・少尉・大志・小志各二人のほか、府生、衛士等がある。衛門府は、大同３年（８０８）左右衛士府に併合されたが、弘仁２年（８１１）１１月左右衛士府を左右衛門府と改めた。靫負司（ゆげいのつかさ）。（『日本国語大辞典』）

[20]高遣戸：清涼殿の南渡殿、後涼殿の南庇にある引戸。（『日本国語大辞典』）

[21]版：鳴板（なるいた）を指す。鳴板とは、清涼殿東孫庇南端の落板敷に降りる階段の床板のこと。ここの板一枚だけは釘付けをせず、踏めば音をたてて鳴るところからの称。見参（げざん）の人は、天皇のそば近くで、声（こわ）づくろいをはばかるので、その音によって天皇は、人の来ることを知った。なりいた。げざんの板。（『日本国語大辞典』）

[22]主上：高倉天皇を指す。

[23]萩戸：清涼殿内の、天皇の居所。

[24]見参：目下の者が目上の人に対面すること。拝掲。また、その挨拶（あいさつ）のことば。（『日本国語大辞典』）

[25]藤原兼光：藤原資長と源季兼女の一男。仁安４年（１１６９。４月８日に嘉応に改元）に２５歳。正五位下で、高倉天皇の蔵人を務める。嘉応三年には、右少弁に補される。（増補国史大系『尊卑分脈』第二編 p.230・『蔵人補任』p.224, 313・『弁官補任』 第一 p.185）

[26]藤原政友。院近臣藤原成親の知行国尾張の目代。

[27]山門（比叡山延暦寺）領である国平野庄の神人を指す。

神人三人の禁獄[29]を触（ふ）る[30]。仍て、衆徒等、奏状[31]を以て座主（ざす）[32]に訴ふると云々。頭弁[33]を以て奏聞（そうもん）す[34]。即ち放ち帰（かえ）されおわんぬ[35]。 是（ここ）に[36]、衆徒等、太（はなは）だ／太（おお）いに、忿怨（ふんえん）[37]の心を懐き、弥（いよいよ）訴訟の思ひを増す。今朝、辰（たつ）の刻（こく）[38]許（ばかり）、先ず京極寺に集参（さんしゅう）し、次いで大内に参る。兼光、御使（おんつかい）として参院（さんいん）し[39]、大衆参入の由を申す。院宣（いんぜん）に云く、『衆徒、早く院に参りて訴へ申すべし。専（もっぱ）ら[40]内裏に参るべからず』と云々。然而（しかれども）[41]大衆、敢へて承引（しょういん）[42]せず。此くの如く職事等往反（おうたん）、已に両三度（りょうさんど）。『尚ほ未だ事切（ことき）れず[43]』と云々、」てへり。（中略）

座主、邦綱卿等、同じく此の所[44]に在り。院より座主に仰せらるるの旨、「衆徒内裏に参るの条、尤も不当。早く院に参るべし。若し尚ほ大衆参らざらば、皆悉く彼の寺に追ひ帰し、座主、僧綱（そうごう）・[45]已講（いこう）[46]を引率し、院

---

[28]逓：遞 の略字。たがいに、かわるがわる。(『大漢和辞典』)

[29]禁獄：獄中に拘禁すること。(『日本国語大辞典』)

[30]触る：広く告げる。告げ知らせる。吹聴する。(『日本国語大辞典』)

[31]「奏」は、天皇に上申するの意。(『日本国語大辞典』)

[32]座主：僧の職名。大寺の寺務を統括する首席の僧。延暦寺の天台座主にはじまり、金剛峰寺、醍醐寺などでもこの職を置いた。(『日本国語大辞典』)
この時の天台座主は明雲。(『平氏政権の研究』田中文英 p.83)

[33]平信範が権右中弁で、高倉天皇の蔵人頭を務めている。しかし、１２月２８日に備前国に配流され、同日権右中弁の職を解かれる。(『蔵人補任』 p.224)

[34]奏聞す：天子に奏上すること。そうぶん。(『日本国語大辞典』)

[35]「放つ」という語の意味を重視して、「神人が」釈放されたと解釈した。ただし、田中文英の『平氏政権の研究』には、１２月１７日に大衆の使者として、朝廷に延暦寺所司と日吉社所司が藤原成親の遠流と左衛門尉藤原政友の禁獄を訴えたが、追い返されたという解釈がみられ、「放し帰つ」の主語は「 延暦寺所司と日吉社所司 」とも考えられる。(増補史料大成『兵範記』五 p.142-3・『平氏政権の研究』田中文英 p.84)

[36]是： 事柄、時点、状況、場合などをさし示す。事態が進展して来たところ、到達点、限界点をさす。 (『日本国語大辞典』)

[37]忿怨：腹を立てて怨むこと。(『日本国語大辞典』)

[38] 現在の午前８時頃。また、その前後二時間。一説に、その後二時間。(『大日本国語大辞典』)

[39]参院：「院に参る」とも読める。

[40]専ら：(否定表現を伴って) 行為や事態が絶対に成立しがたいことを表わす語。全く。決して。全然。(『日本国語大辞典』)

[41]然而：『広辞苑』によると、「然而」を「しかりしこうして」と読み、「そして。そのようなわけで。上述のことを受け、順接的に後に続ける文語的な言い方。」と説明している。しかし、ここでは文脈により、「しかし・そうであるのに」と訳した。

[42]承引：「承引す」、または、「承け引く」と読める。承知し引き受ける。承諾する。同意する。(『広辞苑』)

[43]事切る：事が終る。物事の決りがつく。落着する。(『日本国語大辞典』)

[44]清涼殿萩戸を指す。Appendix 2)と 3)を参照。

[45]僧綱：僧尼を統領し、法務を統轄する僧官。624 年に僧正・僧都・法頭が設けられたことに始まる。後に僧正・僧都・律師となり、佐官（後に威儀師・従儀師となる）が置かれた。(『広辞苑』) 僧綱補任については 『大日本佛教全書』や『五十音引僧綱補任僧歴綜覧 ： 推古卅二年 －

に参るべし。其の時、 尋ね沙汰（たずねざた）有るべし」と云々。即ち其の旨を以て、座主、衆徒に仰す。衆徒、申して云く、「裁報（さいほう）[47]の条、全（まった）くすべからず[48]。仍て内裏に参る。此くの如きの時、幼上と雖も参内するは、是れ、恒例なり。更に以て院に参るべからず。只（ただ）、裁許の仰せを奉（うけたまは）らざらば、本山に帰るべからず。神輿、又、 迎へ奉（たてまつ）るべからず。只、手足に任せて逐電すべし。天台宗の仏法滅亡、此の時に在り」と云々。即ち其の趣（おもむき）を以て、信範に仰す。信範、帰参（きさん）しおわんぬ。此の間、沙汰評定（ひょうじょう）[49]。記録に遑（いとま）非ず[50]。（中略）、
今日、院に於いて公卿等宣儀（せんぎ）[51]有りと云々。

<u>現代日本語訳</u>

巳の時（午前９時−１１時）頃に、ある人が[訪れて来て]言うには、「延暦寺の衆徒が京極寺に集まって会合し、既に成親卿を遠流に処すべきであるということを[朝廷に]申し上げたのだが、それ（成親の遠流）を認めるお許しが出なかったので、直ちに[強訴のため、内裏に向けて]出発した。」ということである。（中略）

すでに午後をまわっている。下人の説明によると、衆徒はすでに内裏まで来ているそうだ。また、上皇の御所に、公卿等が大勢参集している。また、弓矢を持った武士が院の殿中に満ち満ちており、もの凄く狼狽（うろた）えて騒いでいるという。（中略―兼実参内）

また、大衆等は左衛門の陣の外におり、その数の多いことは、数え切れない程であった。それぞれが声を上げ、鼓を叩いていた。その大声や大きな物音を立てて騒ぎ立てることは大変ひどくて、筆で書き記すことは大変難しい（ここにはとて

元暦二年』等を参照。
[46]已講： 僧の学階を表わす称号で、有職三綱の一つ。宮中の御斎会、薬師寺の最勝会、興福寺の維摩会の三会の講師を勤めあげた僧をいう。のちに、天台宗では天台三会の講師を勤めた者をもいう。法相宗、浄土宗などでは今日も学階の一つとして行なわれている。(『日本国語大辞典』)
[47]裁報：１）裁決の結果を報告すること。また、その報告。裁断の報知。２）申請に対する判断。裁許。(『日本国語大辞典』)
[48]全くすべからず：院の裁報の条は認め難いということ。「全く」と「すべからず」の間に脱字があると考えられる。
[49]評定：人が集まり、評議して決定すること。評決。 平安時代以降、親王および公卿が、清涼殿の御前座に列席して臨時に緊急の大事をはかり定めたこと。 (『日本国語大辞典』)
[50]遑あらず：暇あらず。時間的、精神的余裕がない。多く、「…に暇あらず」の形で、対象があまりに多くて、…している時間がないほどである、または、…に時間をとられて他の事をしている余裕がないの意で用いる。(『日本国語大辞典』)
[51]宣儀：僉議を指す。殿上定（てんじょうのさだめ）：清涼殿の南廂にある殿上間（清涼殿侍所）において臨時に重要な政務を議定する親王・大臣以下の侍臣の会議。後世、御膳定の儀を評定というのに対して、殿上定の儀を僉議という。白河上皇以来、院殿上定といって、院の殿上で、臨時に公卿達に政務を僉議させることが盛んになった。(『国史大辞典』)

も書き尽くせない)。
[私は、]右衛門の陣を出て高遣戸の辺りを通り、鳴板（清涼殿東孫庇南端の落板敷）に参入した。[高倉]天皇は、萩戸にいらっしゃる。そこで、[私は天皇に]見参し、天皇が[私をお召しに]なったので、[天皇の]御前に参った。（中略）

私は、[五位蔵人の]兼光を呼んで、この事件の詳細について質問した。兼光が言うことには、「尾張の目代と比良野[庄][52]の神人の間で相論が起こり、[目代と神人は]互いに訴え合っていましたが、[朝廷は]詳しい事情を聞きただすことをしなかったそうです。神人三人を拘禁するという[命令が]出されたため、衆徒等は奏状によって座主に訴えたということです。[座主が]頭弁を通して[院に]奏聞したところ、[神人は]直ちに釈放されました。こういう事情で[53]、衆徒等は激しく忿怨の心を懐き、ますます訴訟を求める気持ちをつのらせています。今朝、辰の刻（午前７−１０時）頃、[衆徒は]まず京極寺に参集して、次に内裏に参っております。私、兼光は御使として院に参り、大衆参入のことを申し上げました。院が宣しておっしゃるには、『衆徒は早く院に参って訴え申せ。内裏に参ることは絶対に許さん。』ということです。それにもかかわらず、大衆は決して承諾しようとしません。このような状況下で、蔵人等は、すでに三度も[天皇と院の間を]往復しましたが、『まだこの件は未解決のままである』と聞きました。」ということである。（中略）

座主（明雲）[54]と邦綱卿等は、同じくここ（清涼殿萩戸）に参上している。院が

---

[52]平野庄の位置においては、Appendix 4)を参照。現神戸町一帯および揖斐(いび)郡大野(おおの)町南端に比定される庄園で、北西部は山城石清水八幡宮領泉江(いずみえ)庄(現揖斐郡池田町)、南部は伊勢神宮領中河(なかがわ)御厨(現大垣市)に隣接していたらしい。比叡山延暦寺領で、神戸町と大野町との間を流れる揖斐川には、当庄の名をとどめる平野荘橋が架かる。嘉保 2 年(1095)美濃国に下向して庄園の沙汰をした天台下僧らが、非道を行ったため、国司源義綱は宣旨を被って悪僧らと合戦している(「中右記」同年 10 月 23 日条)。嘉承元年(1106)には山僧の乱行に手を焼いた国主が辞任しており、これらの事件は美濃国内の庄園拡張をめぐって、比叡山の僧らが活発に動いていたことを物語るもので(岐阜県史)、当庄の成立と関係があるとする説もある。「天台座主記」によれば、保安 3 年(1122)八月七日に中河御厨を「山門領平野庄」の加納と称して取込もうとする動きがあった。嘉応元年(1169)から同二年にかけての山門衆徒強訴事件のきっかけとなったのは、中納言藤原成親の尾張国目代が当庄の日吉社神人に乱暴をはたらいたことによる(「兵範記」同元年 12 月 17 日条など)。延暦寺は当庄内に勧請した日吉神社を庄園支配の信仰的拠点とした。(『日本歴史地名大系』)

[53]是に：神人は釈放されたが、藤原成親の遠流や藤原政友の禁獄は認められていないので、大衆はそれに対する不満をつのらせている。ここでは、そういう状況を指す。

[54]明雲 (1115 – 1183): 第 55−57 代天台座主。円融房座主と称する。大納言久我（源）顕通の二男慈雲房と号し、比叡山の弁覚に顕教密教を学び、相実に法曼流の灌頂を受け、のち相実の弟子となり、明快を祖とする台密十流の梨本流を継ぎ円融房と住する。久寿 3 年（1156）9 月権少僧都、永暦元年（1160）3 月法印に任ぜられ、応保 2 年（1162）5 月、勅により戒和上として叡山大衆に授戒、永万元年（1165）12 月六条天皇の護持僧となった。仁安 2 年（1167）2 月に 30 歳で天台座主、10 月権僧正、同 3 年 7 月高倉天皇の護持僧となり、安元 2 年（1176）4 月、後白河法皇登叡の際受戒の師となり、5 月僧正に任ぜられた法務を兼ねる。治承元年（1177）延暦寺末加白山の衆徒が賀国守藤原師高の押妨を訴え神輿を奉じて東坂本に入ると、叡山大衆も呼応し日吉神

座主におっしゃった内容は、「衆徒が内裏に参ったことは、全く道理に叶っていないことある。早く院のもとに参上せよ。もし、それでも大衆が[院に]参らないならば、皆すべて彼の寺[延暦寺]に追い帰せ。座主は僧綱や已講を引き率れて、院に参れ。その時、事情を尋ねることになるであろう。」ということであった。その内容を、座主は衆徒に伝えなさった。衆徒が申して言うには、「[院の]裁許は認められない。だから、内裏に参ったのだ。こういった状況においては、天皇が幼いといえども、内裏に参ることが恒例（先例）である。改めて院に参るべきではない。[天皇の]裁許をいただかなければ、本山[比叡山延暦寺]に帰らない。神輿もまた、お迎えし[延暦寺に]お戻しすることはできない。ただ、自分の好きなように自由に任せて逃亡すべきである。今この時こそ、天台宗の仏法滅亡の時であるぞ。」ということだった。即座にその内容を[頭弁の]信範に伝えた。信範が[院に]帰参した。[55]この間に、この事件を解決するための評議があったが、その評議については、記録しつくせない。（中略）

今日、院のもとで[も]、公卿等の評議があったと聞いた。

英訳[56]

Around the hour of the snake (9-11 am),[57] a certain person said "The assembled monks[58] of Enryakuji have gathered at Kyōgyokuji. [59] Soon they said that Lord Narichika[60] should

---

輿を奉じ朝廷に嗷訴に及んだ事件に際し、このことが、加賀領を師高に没収されたのを恨んだ明雲に起因すると、師高の父西光が後白河法皇に讒奏したため、明雲は伊豆に遠流されたが、配所への途次栗津で叡山衆徒が奪還した。6 月西光らの平氏討伐のはかりごとが露見し、同 3 年僧正に復し、再び座主に補され、同 4 年 6 月天王寺別当に任ぜられ 7 月護持僧となった。養和元年（1181）十二白河六箇寺の別当に補され、翌年大僧正に昇った。寿永 2 年 1 月、院御所方住寺殿に参籠の折、源義仲が院御所を襲い、円恵法親王とともに流矢に当たり、19 日示寂した。（『平安時代史事典』）

[55] 『兵範記』同日条に、「下官并金吾等帰参院、申此旨」とある。（増補史料大成『兵範記』五 p.146）

[56] 玉葉 (*Gyokuyō*): Also called *Gyokukai* (Sea of Jade); it is the journal of the court official Fujiwara Kanezane (藤原兼実). Kanezane served as regent in the imperial court and liaison to the Kamakura shogunate (1192－1333). Written in classical Chinese prose, the *Gyokuyō*'s 66 chapters are a valuable source of information on the late 12th century. At the time he wrote the entry translated here, Kanezane was 21 years old, a senior courtier of the second rank, and major controller of the right. (*Kugyō bunin*, vol. 1, 469)

[57] 巳時 (*mi no toki*): 9 am – 11 am.

[58] 衆徒 (*shuto* or *shūto*): The assembled monks, both scholars and non-scholars, of a temple. (Jeffrey Mass, *Court and Bakufu in Japan*). According to the *Kadokawa zen'yaku kogo jiten,* the word signifies armed monks in particular.

[59] 京極時 (Kyōgokuji): A temple located on the eastern side of East Kyōgoku Boulevard and the northern side of Third Ward Avenue. According to the *Konjaku monogatari*, Kyōgokuji was founded by Prince Kayō, the son of Kanmu Tennō (737-806); later, it became a branch temple of Enryakuji. In 1113, the monks of Mt. Hiei gathered outside of Kyōgokuji carrying *mikoshi*. In subsequent decades, they frequently staged similar demonstrations at this location, and Kyōgokuji became a major base of operations for the Mt. Hiei monks in the capital. Kyōgokuji was destroyed by fire in 1165, and burned down again during the Ōnin War; it was then relocated to what is now Kamigyō Ward, becoming an independent Shingon temple. The

be exiled. However, permission [to exile him] was not granted, so they immediately set out [for the royal palace].”

(Omitted) Noon had already passed when a servant explained, “The assembled monks have already gone to the royal palace.[61] Also, senior nobles and others have gathered in great numbers at the retired *tennō*’s (Go-Shirakawa’s) residence. Furthermore, men armed with arrows are crowding into the retired *tennō*’s mansion; there is great turmoil.”[62] (Omitted) The assembled monks were outside of the door of the guardpost for the Gate Guards of the Left.[63] Their numbers were so great they could not be counted. Each one shouted and beat a drum. Their clamoring and commotion were beyond measure. It cannot be recorded in mere words.

From the guardpost of the Gate Guards of the Right,[64] I went in towards the door in the south corridor of the Seiryōden[65] and walked onto the nightingale floor.[66] The *tennō* [Takakura] came to the Clover Door.[67] I greeted [the *tennō*]. He summoned me, and I went before him. (Omitted)

I called for Kanemitsu[68] and inquired about the details of this affair. Kanemitsu said, “There is a dispute between the resident deputy[69] of Owari [Masatomo][70] and the shrine

---

main enshrined image is a statue of Yakushi-Nyorai (Bhaisajyaguru) dating to the mid-Heian. (*Heian jidaishi jiten*)

[60] 藤原成親 (Fujiwara no Narichika): On the 24th day, at the age of 32, Narichika was stripped of his rank, removed from the post of major counselor and sentenced to exile; four days later, on the 28th, he was recalled to the capital, and on the 30th he was restored to his former rank and position.

[61] According to the *Hyōhanki,* the monks did not actually enter the inner palace proper, but gathered outside of the Kenrei Gate. There, they made the pointedly insulting gesture of setting down their six sacred palanquins so that they were facing to the south – that is, away from the *tennō*. See the entry for the 23rd day of the 12th month of Kaō 2 in *Hyōhanki*.

[62] The royal police gathered in the retired *tennō*’s residence with a number of warriors led by Taira no Shigemori, Munemori, and Yorimori. See the entry for the 23rd day of the 12th month of Kaō 2 in *Hyōhanki*. (*Zōho shiryō taisei* vol. 22, 146-7)

[63] 左衛門の陣 (*saemon no jin*): Guardpost of the Gate Guards of the Left .

[64] 右衛門の陣 (*uemon no jin*): Guardpost of the Gate Guards of the Right.

[65] 高遣戸(*takayarido*): The name of a sliding door on the southern bridgeway (South Eaves Porch) of the Kōrōden pavilion of the Seiryōden.

[66] 版 (*han*): Here, *han* appears to refer to a nightingale floor (*naruita, nariita* 鳴板), or a floor whose boards were left unnailed so as to make noise when someone walked across them. Such boards were located at the south end of the eastern lower porch of the Seiryōden; this section of the floor was called *ochiitajiki* (落板敷).

[67] 萩戸 (*hagi no to*): The name of the door to the *tennō*’s quarters in the Seiryōden; and, by metonymy, the *tennō*’s quarters themselves. *Hagi,* commonly translated “clover” or “bush clover,” belongs to the genus *Lespedeza* and is associated with autumn.

[68] 藤原兼光 (Fujiwara no Kanemitsu): The eldest son of Fujiwara no Sukenaga and the daughter of Minamoto no Suekane. Kanemitsu was 25 years old in 1169, when the events described here occurred. A courtier of the lower senior fifth rank, he served as a royal secretary under Takakura Tennō. In Kaō 3, Kanemitsu was appointed lesser controller of the right (右少弁, *ushōben).* (*Sonpi bunmyaku,* vol. 2, 230; *Kurōdo bunin,* 224, 313; *Benkan bunin*, vol. 1, 185)

[69] 目代 (*mokudai*): Most commonly the personal deputy of an absentee provincial governor; he served as the immediate link between central authority and the provincial office. He might also function as a ranking land-administrator post within a *shōen*-holder's central apparatus. (Jeffrey Mass, *Court and Bakufu in*

dependents of Hirano Estate.[71] As they argued with each other, [the court] did not ask about the details, but rather imprisoned three shrine associates. Apparently, the assembled monks complained to Head Abbot [Myōun][72] in a petition. Through the head of the Royal Secretariat cum controller (Taira no Nobunori), they petitioned the retired *tennō*, and the shrine dependents were released. Nonetheless, the assembled monks were greatly incensed, and their contentious feelings grew rapidly. This morning, around the hour of the dragon (7 – 9 am),[73] they gathered in Kyōgokuji; from there, they went to the royal palace. [I] Kanemitsu went to the residence of the retired *tennō* (Go-Shirakawa) as a messenger, and announced the arrival of the assembled monks [at the royal palace]. According to the orders of the retired *tennō*, the assembled monks should immediately go to the retired *tennō* and present their complaint. They were absolutely not to proceed to the inner palace. However, the monks impudently refused to obey. The royal secretaries[74] had already gone back and forth [between the *tennō* and the retired *tennō*] three times, but I hear that the matter is not yet resolved."

The Head Abbot, Lord Kunitsuna, and the rest were there (in the Seiryōden, at the Clover Door) as well. The Head Abbot was instructed by the retired *tennō*: "The entrance of the assembled monks into the royal palace is most improper; you must proceed to the residence of the retired *tennō* immediately. If the monks will not go, then you must drive them back to the temple. The Head Abbot must bring the prelates[75] and the masters of the

---

Japan)

[70] 藤原政友 (Fujiwara no Masatomo). The deputy governor of Narichika's proprietary province (知行国, *chigyō*) in Owari (尾張).

[71] 比良野荘 (Hirano no shō): A *shōen* in Minō Province held by Enryakuji; usually written with the characters 平野庄.

[72] 明雲 (Myōun, 1115-1183): The fifty-fifth and fifty-seventh head abbot of the Tendai sect. The second son of Minamoto no Akimichi, Myōun studied esoteric Buddhism under Dharma Seal Benkaku; in 1160, he himself attained the rank of Dharma Seal (法印, *hōin*; often translated "His Holiness"). In 1165, Myōun was appointed as a protector priest (護持僧, *gojisō*) to Rokujō Tennō; three years later, he held the same position under Takakura Tennō. At the age of 30, he became head of the Tendai sect. In 1176, when Retired Tennō Go-Shirakawa climbed Mt. Hiei, Myōun administered the Buddhist precepts to him. A year later, the assembled monks of Mt. Hiei staged a mass protest against the provincial governor of Kaga, Fujiwara no Morotaka, who had confiscated land held by a branch temple of Enryakuji. Myōun was blamed for the incident and exiled to Izu, mostly at the urging of Morotaka's father, Saikō; however, midway through his journey, he was forcibly 'rescued' by the monks of Enryakuji. Two years later, after Saikō was implicated in an anti-Taira plot and subsequently executed, Myōun was restored to his former position. In 1183, when Minamoto no Yoritomo attacked the Rengeō-in, Myōun was killed by a stray arrow. (*Heian jidaishi jiten*) This episode also appears in the *Heike monogatari*.

[73] 辰の刻 (*tatsu no koku*): 7 am – 9 am.

[74] 職事 (*shikiji*): Another term for a royal secretary (*kurōdo,* 蔵人), especially one who is concurrently posted as a controller.

[75] 僧綱 (*sōgō*): The Prelates' Office, reportedly instituted by Great King Suiko in the early seventh century. Its members were the highest-ranking Buddhist monastics in the realm, and they served as leading ritualists and teachers. Prelates of the Sōgō were appointed and promoted by command of the Great King and later, the *tennō*. Promotion of such prelates was more or less regular after an initial appointment to *risshi* rank; only rarely was a monk promoted to a rank above *risshi* without having first served in that most junior position. (Joan Piggott, *The Emergence of Japanese Kingship*). Here, the term appears to refer to the individual who held the office rather than the office itself.

three great royal services[76] to the residence of the retired *tennō*. There, they will be questioned." These were the orders given by the abbot to the monks. [But] the monks replied, "We will not comply with the terms of this decision. This is why we came to the royal palace. Although the *tennō* is young, it is established precedent to go to the palace. We absolutely will not go to the residence of the retired *tennō*. If we do not receive the requested judgment by the *tennō*, we will not return to our temple on the mountain. Furthermore, we will not carry our sacred palanquins back [to the shrine], but rather we will simply trust our limbs and take flight. Now is the death of the Buddhist Law[77] for the Tendai sect." Nobunori was given orders,[78] and then returned [to the residence of the retired *tennō*].[79] In the interim, there was a discussion leading to this decision, but it would take too long to fully record. (Omitted)

Today, the senior nobles held a discussion at the residence of the retired *tennō.*

---

[76] 已講 (*ikō*) : An abbreviation for *san'e ikōshi* (三会已講師), or "masters of the three great royal services." The three great royal services were "the Vimalakīrti Service at the Kōfukuji (*yuimae*), the Suvarnaprabhāsa Service at the [Royal] Palace (*misaie*), and the Suvarnaprabhāsa Service at the Yakushiji (*saishōe*), [which] were annual events sponsored by the Court to protect the state." (William and Helen McCullough, *A Tale of Flowering Fortunes*, 747)

[77] 仏法滅亡 (*buppō metsubō*):

[78] Although it is not clear who gave these orders, it is likely to have been the regent, Motofusa.

[79] It seems most probable that Nobunori returned to the residence of the retired *tennō*, but it is also possible that he returned to the royal palace. See the entry of the 23rd day of the 12th month in Kaō 2 in *Hyōhanki*. (*Zōho shiryō taisei* vol. 22, p.146.)

Appendix

1）歴代の美濃国守と尾張国守を調べると、１１５２年から１１５９年までは藤原家教（藤原成親の兄弟）が美濃国守を勤めており、１１６１年以降は後白河院の知行国である。一方、尾張国では、１１６８年から家教が国守であり、成親が知行国主となっている。これより、院寵愛の近臣である藤原成親とその親族の両国における影響力が伺える。『岐阜県史』によると、美濃国内の庄園拡張をめぐって、比叡山の僧らが活発に動いていたらしく（日本歴史地名大系）、美濃国や近接する尾張国で勢力をもつ成親と延暦寺との抗争は長期にわたって蓄積されてきた性格のものであると推測される。

<u>美濃国守</u>

◦仁平 2 年（1152）～　　家教（成親の兄弟）の知行国

◦保元 2 年～平治 2 年（1159）　修範（信西息）

（中略）

◦応保元年（1161）～嘉応元年（1169）
修範（後白河院の知行国）

<u>尾張国守</u>

◦平治元年～　　平頼盛

◦長寛 3 年（1163）　　平重衡（この時は幼少であったので、実際は清盛が政務をとっている可能性が高い。）

◦仁安元年（1166）～　　平保盛（頼盛の知行国）

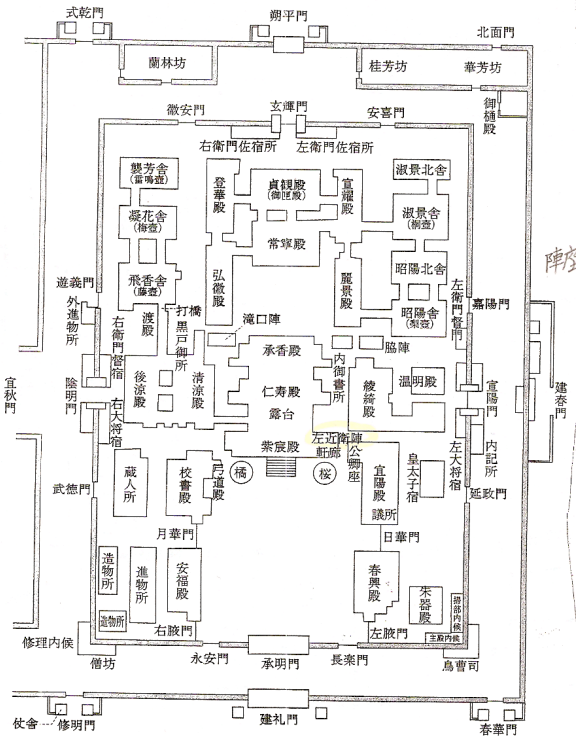
◦仁安 3 年（1168）～嘉応元年　藤原家教（成親の知行国）

『日本史総覧』II 国司一覧参照。

2）内裏地図

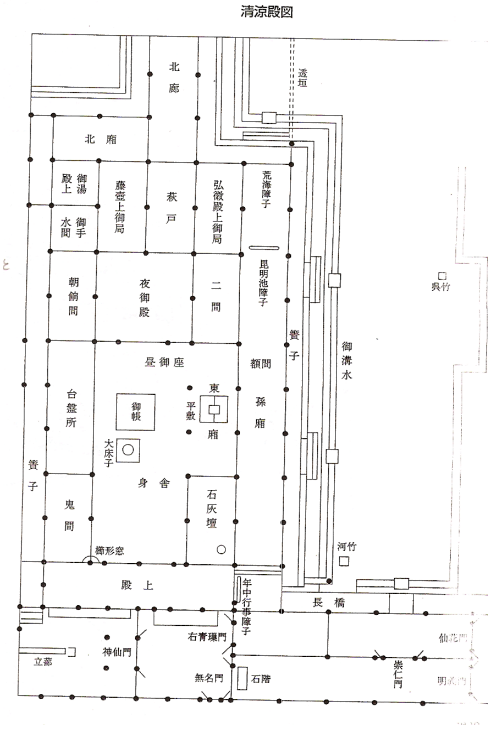
付録　古記録便覧

内裏図



3）清涼殿の「版」: 鳴板を指す。清涼殿東孫廂南端の落板敷に降りる階段の床板のこと。

清涼殿図



4) 平野庄

平野庄は、現神戸町一帯および揖斐(いび)郡大野(おおの)町南端に比定される。